2018年11月17日

全体討論

パネラー：新津健一郎
菊池百里子
蓑島　栄紀
髙橋　昌明
司会：高久　健二

高久：時間となりましたので、討論を始めさせていただきます。そして、今回が最後のシンポジウムとなりますので、終わりに総括を準備しております。

今回、4人の先生方にご講演をしていただきました。今回のシンポジウムでは、日本列島の南方と北方の交流・交易、そして中国との交易・交渉ということが全体のテーマになったかと思います。そこで、4人の先生方に今回のシンポジウム全体を踏まえて、それぞれ追加のコメントをいただきたいと思います。

では、最初に古代ベトナムについてご講演されました新津先生、いかがでしょうか。全体を踏まえてコメントなどをお願いしたいと思います。

新津：私からは追加のコメントを申し上げ、また、いただいたご質問にもお答えしたいと思います。

「交州の当時の人口規模はどの程度だったのか」というご質問をいただきました。私の配布資料の10ページには少しだけ当時の戸口記録、つまり世帯数と人口数のデータを載せております。ほかの郡についても同様に記録が残っておりますので（【補足】『漢書』巻28地理志・『続漢志』郡国の統計を指します。これを再整理した研究として、Bielenstein Hans, "The Census of China during the Period 2-742 A.D.," *Bulletin of the Museum of Far Eastern Arts* 19, 1947: 梁方仲『中国歴代戸口・田地・田賦統計』上海人民出版社、1980年などがあります）、これらを集計していけば当時の交州の人口規模を算出することができますし、それを洛陽や長安（つまり首都圏）、あるいはいまの南京周辺などのように、ほかの地域と比較することができます。ただ、その場合、これはあくまでも行政が認知していた人数あるいは世帯数ですので、家族の形態、あるいは山の中に住んでいるなどして行政が把握していない人たちがいたということには注意が必要です。ご質問への回答は以上です。

情報の補足ですが、本日のサブタイトル「交流」と「交易」に関して、1点ずつ補足をいたします。

まず、交流についてですが、本日、私は古代の交州（北部ベトナム地域）についてお話をいたしましたが、そのときに言い落したことが1つあります。何かと申しますと、古代の中国王朝に

とってこの地域は流刑地という性格も持っていたということです。囚人などを送り込む、そういう場所で、その中には粗暴犯だけではなく、政治犯のようにある程度文化や知識になじんだ人たちもいたことが知られています。資料にはお名前を挙げてはいませんが、片倉　穣先生などが研究されています（『ベトナム前近代法の基礎的研究:『国朝刑律』とその周辺』風間書房、1987年）。ですから、このように流刑などを通じて文化が辺境にもたらされるということもあった、という点を補足しておきたいと思います。

それからもう1つ、交易に関して菊池先生のご報告の中で、ヴァンドンやホイトンという港の名前が出てまいりました。これらは、私がお話した時代に使われていたのではないかという疑問を抱かれた方もいらっしゃるかもしれませんが、少なくとも2世紀、3世紀について申し上げれば、使われていた形跡は、史料上確認することができません。ヴァンドン一帯には、この時代には行政組織がなかったのではないかと思われますし、ホイトン一帯も中国王朝の影響下にあったかどうかは微妙なところです。大規模な海港が造営されていた証拠はいまのところは確認できておりません。以上が私からの質問の回答と補足になります。

高久：ありがとうございます。私ごとで恐縮ですが、交趾郡と同じ頃に設置された楽浪郡のことを研究しております。今日の先生のご報告をお聞きし、楽浪郡の場合ととても類似する部分、そして全く違う部分があるということを認識しました。北と南を比べて相違点と類似点がみえてきて、今後の研究の方向性が見出せるのではないかと思いました。

そこで、私から先生にお聞きしたいことがあります。楽浪郡では土着豪族層の台頭が重要であり、交流・交易においても彼らが果たした役割は非常に大きかったと考えています。郡県の属官たちは、少なからず土着豪族から登用されたと思いますが、交趾郡における土着豪族層の動向は把握できるのでしょうか。

新津：ご質問ありがとうございます。今日の報告の中にもいくつか郡の行政のスタッフということで名前が出てきましたが、彼らがほぼ名前を知りうる限りの当時の現地の人ということになります。私も今回、報告準備の際に史料を横断的に調べたのですが、当時の交趾郡やその周辺では系譜をたどれるような豪族の名前はあまり残っていないという状況でした。一代限り、あるいは親子二代程度に留まる例がほとんどです。例えば楽浪郡では著名な豪族として王氏のような例があると思いますが、同じように代々在地で力を持つような人は、交州の場合には現存する史料から確認できません。

高久：ありがとうございます。そのような部分が楽浪郡との違いなのかなと思いましたので、ご質問させていただきました。続きまして、2番目にご講演いただきました菊池先生はいかがでしょうか。

菊池：コメントというよりも感想のようなものですが、まず、本日一番最初にご講演された新津先生のお話ですが、まさにこの時代というのはベトナムの歴史学や考古学の中ではいままであま

り触れられてこなかった時代の研究になります。最近はベトナムの考古学の研究者たちや国際的な共同研究チームによるルイロウ城の発掘調査が進められ、やっとこの時代に対するベトナムの学会の関心が高まってきています。まさにそのようなときにこの新津先生のご研究があり、この時代がだんだんと詳しくわかってくるような、今日はそんな感じがして非常に嬉しく思いました。

簑島先生のご報告では考古学資料がふんだんに使われていて、この様に文献研究と考古学研究とが一緒になって進めていけるというのは、これからの学術の発展を考える上で非常に良いお話をうかがえたと思っております。

髙橋先生のご報告の中で銅銭の話が出てまいりまして、私も先ほど申し上げましたが、ベトナムで銅銭の調査を現在おこなっているところです。その中で、ベトナムでもかなり大量の北宋銭が出土しております。先ほど、先生から宋の時代のお金がたくさん日本に流入していたというお話がありました。その時代、宋では銅銭の流出を禁止したり、貿易船に銅銭が積まれていないかどうかをチェックするようなこともおこなわれていたというぐらいに銅銭の流出が非常に問題となっておりました。先ほど、周縁地域が中国にどういう影響を与えたかというお話しがありましたが、海域アジアの大きな交易ネットワークの渦が発展していく過程で、中国の銅銭が流出して中国が困るというように、交易が中国に与えた影響は大きくなっていったのではないかと感じました。

それからいただいた質問がいくつかございますので、2つほど選ばせていただきました。残りについては、もし時間があれば後ほどお話しさせていただければと思います。

まず、イスラム陶器が発見されたことにはどのような意味があるかということですが、イスラム陶器などの交易にはムスリム商人の存在が考えられます。泉州にはモスクやムスリム商人の墓があります。そういった西アジアと中国を結ぶようなムスリム商人による交易のネットワークが発達しておりまして、ベトナムでもイスラム陶器が出土したり、あるいは初期貿易陶磁器が一緒に出土するということを考えますと、そういったムスリム商人の交易ネットワークの中に、この北部ベトナムというのも入っていた可能性があるのではないかと思います。

ホイトンで出土した「官」の文字のある白磁ですが、この「官」の文字があるというのは官窯の製品であり、王朝の管理のもとで生産された製品ということになります。一般的な陶磁器とは一つ格が違うといいますか、一線を画するような製品であるというふうに考えられます。当時、ヴァンドンは国際的な貿易港として存在していたのですが、おそらくこのホイトンというハノイから遠く離れた港も、何かしら官の管理のあるような港だったという意味があるのではないかと考えています。以上です。

高久：ありがとうございました。菊池先生が長年調査されているデータをもとにお話しいただきましたので、考古学を研究しているものにはとてもわかりやすいお話でした。

先生は港の調査をされていると思いますが、当時の港の実態について、発掘調査の成果も踏まえてもう少し詳しくお話いただけないでしょうか。港の様相はどのようなものだったのでしょうか。

菊池：様相といいますか、今日ご紹介したヴァンドンというところは、内陸から離れた小島につくられた港です。この小島につくるというあたりが、外からの侵入を防ぐという、防御的なイメージといいますか、船が直接陸の方まで入ってこられないようにしているというシステムになっているのかなと思います。北部ベトナムは中国などから侵略される歴史があり、そういう歴史の中で、島に港をおいたということで外敵に対する備えを感じます。

そしてこれらの島に船を停泊させて、荷物の積み下ろしをしていたのですが、面白いことに、今回ご報告しましたのは第５地区というところですが、もう少し離れた第３地区でも発掘調査をしておりまして、そこでは中国の陶磁器が出てこず、ベトナムの陶磁器ばかり出てきます。おそらく、外国船が停泊して商品を下ろすところと、もう１つ、ベトナム国内で集荷した商品を置いておいて、それを船に積み込むところと、役割の明確に異なる港が存在していたのかもしれないと考えています。

高久：ありがとうございました。おそらく港には集積地のような場所もあるのではないかと思います。

もう１つお聞きしたいことがあります。先生の発表の中でドンテェック遺跡のお話がありました。これは埋葬地の出土品ということですが、そこから龍泉窯系の青磁などが出土しています。これらは在地の上位階層の墓だと思いますが、これらの陶磁器はどのような階層の人々が持てるものだったのでしょうか。日本でも鎌倉時代に大量に龍泉窯系青磁が入ってきますが、関東ではやはり鎌倉道周辺の館跡などからしか出土しませんので、庶民の持ち物ではなかったわけです。ベトナムではどのような位置づけだったのでしょうか。

菊池：同じく庶民が持てるようなものではなかったと思います。今日ご紹介したような龍泉の青磁もベトナムでは特定の遺跡からしか出てきていません。タンロン皇城遺跡やドンテェック遺跡、それから胡朝城という、これも世界文化遺産に登録されている、胡朝という陳朝の後に立つ、数年間しかなかった短期政権のお城の遺跡など、都城関係に限定的に、この時代の龍泉の青磁が出てきておりますので、そういった意味では特別なものであったと考えています。

高久：やはり、日本と同様に威信財的な意味も持っていたということでしょうか。ありがとうございました。

次に簑島先生、お願いいたします。発表時間が少し短かったようですので、もし、追加のコメントがありましたら、お願いしたいと思います。

蓑島：ご質問をいただいておりますので、まずそれにお答えします。

１点、オホーツク文化の人口規模についてご質問いただいております。この集落とこの集落とが関連して１つの単位をつくっていたのではないかというような、オホーツク文化の社会組織に関する推定などはありますが、私が知る限り、具体的な人口規模に踏み込んだ研究はないように思います。たぶん、未発見の集落や墓地などもあり得ますし、難しい問題なのだと思います。こ

れについては私も、あまりうかつなことは言えないところですので、この点はこのぐらいでご勘弁いただければと思います。

それから、秋田城の朝貢について、「朝貢交易」や「交易システム」など用語がわかりにくく、どのように定義して使われているのか、「朝貢」と「交易」は違うものでは、というご質問をいただいております。この点は、私も不用意なところがありましたが、まずもって、前近代のアジアの「朝貢」には、それに対する「饗給」や「回賜」などを含め、広い意味で「交易」としてとらえうる側面があります。ただ今日は、そうした朝貢＝交易の場に便乗して、王臣家の使者のようないろいろな人々が集まって私的交易をおこなったりする状況など含め、もう少し用語に幅をもたせて用いました。同じような現象は、秋田城だけでなく、いろいろな場面で起こっていたと思いますが、ケースごとに、用語の定義をもう少し厳密に使い分けなければ、いろいろな問題がごっちゃになってしまう恐れがあります。今後気を付けるべき課題とさせていただければと思います。

追加でいくつかコメントをさせていただきます。今日の私の話は、どちらかというと本州との関係の比重が大きく、大陸との北回りの交流については、やや消極的だったと思います。一時期の歴史学界では、北海道や東北北部などを経由して、北回りの交流が相当にあったというイメージが語られましたが、最近、考古学の研究者が実証的な検証を深めるなかで、北回りの交流をそこまで評価できないのではないか、という傾向が強まっています。大陸との交流の盛んなオホーツク文化の時期は、むしろ例外的なのではないかという見方もあります。ただ、9世紀については、本日も述べましたように、大陸方面との交渉が低調となる要因も想定し得るので、北回り交流が衰えた可能性は高いと考えていますが、その後の10世紀や11世紀以降については、これもあまりうかつなことは言えませんが、考古の方々がいうほど交流が低調だったとは限らないと思っています。本日もお話しましたように、古代末～中世初の日本では、北方に対する地理認識は、大陸との北回りのつながりを前提としています。交流の物的な証拠にしても、点的ではありますが、決して零細ではないと考えております。北回り交流の実態・意義については、今後の調査の状況などを待って、まだ評価を保留しなければならないところがあると感じております。

その関連で付け加えますと、今日は9世紀以後のお題を与えられましたので、お話しなかったのですが、新津先生のお話にあったような時代には、ご承知の方も多いかと思いますが、魏の実権を掌握しつつあった司馬氏の主導下に、遼東やさらには高句麗、挹婁までの遠征がおこなわれるなど、北方への積極的な政策が展開しています。また、北方の貂（テン）の製品が、公孫氏や高句麗から孫呉に渡っている事例もあります。この時期、中国王朝の政治的･経済的な影響力が、北東アジア地域を巻き込んで、新たな動きを生じさせていた可能性があります。同じ頃、大陸系の土器がサハリンから出てきたり、続縄文時代の北海道とサハリンとのあいだで交流が深まったりという動きが指摘されています。北東アジア規模の政治・経済とのからみで、北回りの交流について、3世紀前後がひとつの先駆けの時期となっているのではないかという気がしています。

こうした北回りの実態的な交流が、倭国や日本の対外認識には関わらないという意見もあります。つまり、観念は観念であって、実態とは別ものだという考えです。例えば、児島恭子先生などはそうお考えですし、あるいは9世紀以後、北方のエミシ世界に対する観念が変化するのは、

天皇制の変容や国内事情によるものだという伊藤　循先生のお考えなどもあります。それに対して、かつて大石直正先生が言われたのは、北方に対する観念は、実態と連動しながら変化するということだと思います。この点に関して、私は大石先生の意見に近いです。例えば当時、対新羅観の変容も、新羅との現実の関係、葛藤の中で生じていました。それと同じように、「エゾ」認識のような北方世界に対する新しい観念の登場も、現実の北方問題との葛藤の中で生じてきた側面に目を向けるべきだろうと思っております。

最後にもう１点補足です。今日は時間がなくてほとんど言及できなかったのですが、レジュメの最後の方に、高井康典行先生の「渤海的秩序」という概念を、列島の北方史に当てはめて応用できないだろうか、という思いつきを書いてみました。改めて考えてみますと、安倍・清原氏や奥州藤原氏の時代から、津軽安藤氏、さらには蠣崎氏―松前藩という歴史のなかで、北海道・アイヌ社会が日本の中央政権と直接的に交渉していた時期というのは、前近代では７世紀から９世紀にかけてのわずかな期間に限定されています。つまり、前近代の北海道・アイヌ社会と日本社会のあいだには、常に、その交流･交易を緩やかに媒介する勢力が介在していました。この点が、高井先生の問題提起に接して､気になっているところです｡アイヌ民族がなぜ国家形成をしなかったのかという問題については、これまでさまざまな要因が考えられていますが、アイヌ民族をめぐる対外的な条件という側面からも考えてみる必要があるのではないかと感じております。非常に大風呂敷ではありますが、今後の大きな課題だと思っております。雑駁ではありますが、以上となります。

高久：ありがとうございます。先生のご講演はたくさんの考古資料が使われていて、大変勉強になりました。

そこで、先生にお聞きしたい点があります。北方の特産物である動物関係の皮などはかなりの需要があり、本州に入ってくるというお話をされました。動物の皮というのは、皮にするまでが大変であり、その動物がいればいいというものではなく、皮なめしなど特殊な技術や特殊な道具が必要になってくると思います。これらの技術や道具は独占されていたのでしょうか。擦文文化がそれらを目指して北方に広がっていき、オホーツク文化に入っていくという話でしたが、擦文文化の人々はそのような技術・道具を持っていたのでしょうか。

蓑島：いまご質問いただいた点は、現在研究途上だと思います。ラウンドスクレーパーという、黒曜石で皮をなめす道具が、続縄文文化の後半期の、鉄がかなり普及していた段階にも、北海道だけでなく、岩手県の角塚古墳の近くなどで、かなりたくさん出てきます。それを電子顕微鏡で見ますと、明らかになめしに使っている痕跡があります。そういうものが続縄文と古墳文化の接点のあたりでかなり出てくるということは、当時の皮革類の生産が、権力によって一定程度掌握されていたことを考えさせるものだと思います。一方、さらに北の方に行くと、そうした技術がどのような状況にあったのか、「独占」という面でどうだったのかというのは大変難しい問題ですが、擦文社会の階層化という問題を考えたとき、それらの技術・技術者の実態、存在形態は重要なテーマになると思います。皮なめしについては、『日本書紀』などに、渡来系集団がそうし

た技術をもたらしたという記述もありますので、そうした点との関係も今後の課題として検討していきたいと思います。簡単ですが以上となります。

高久：ありがとうございます。もう１点、先生にお聞きしたいと思いますが、今回のテーマが北と南ということでした。先生のお話は本州と北方世界との交易でしたが、南方との交易品は北にはどこまで入っていくのでしょうか。先生がお話された時代は、菊池先生のお話ともかさなると思います。南方系の文物、具体的には龍泉窯系青磁などの陶磁器ですが、どこまで入るのかについてご説明いただければと思います。

蓑島：私の知っている限りですと、龍泉窯などは、出土例があることはありますが、数的にはほとんど入っていません。一般にアイヌ民族は陶磁器をあまり好まなかったと言われます。道南や余市町あたりの沿岸部の遺跡で、陶磁器が多く出てくると、むしろ和人の拠点ではないかと言われることが多いですが、そういうことが１点あります。

それから、平泉の螺鈿なども気になりますが、今回は話題に入れることができなかったのですが、文室宮田麻呂など、9・10 世紀に大宰府あたりで交易している人たちと、秋田城あたりとの関係はどうだったか。今日ご紹介した浜田久美子先生の着想にも関わってくるのですが、9・10 世紀頃の東アジア海域的な交易が、北方世界と接点を有する兆候もあったのではないかと考えています。今回は準備が間に合わず盛り込めませんでしたが、そうした問題についても、また検討していきたいと思っております。

高久：平泉の柳御所遺跡ではたくさん出土しているので、それらがなぜ北方世界に入っていかないのかということが少し気になりました。ありがとうございます。

では、最後に髙橋先生よろしくお願いいたします。

髙橋：１つご質問をいただいております。

平安貴族は対外的には消極的で、それに比べて清盛は積極的であったという話ですが、後白河法皇はどうだったのか、あるいは鎌倉政権はこの点ではどうだったのかというご質問です。

後白河法皇は、先ほど申しましたように、自分の信仰をもとにして積極的に明州の阿育王山寺と関係を持とうとしたということはわかっていますが、中国との関係で名前が出てくるのはいつも清盛とセットです。どこまで海外貿易のことを本気で考えていたかはよくわかりません。ただ、性格的にはとても好奇心旺盛で、しかもフットワークが軽く、頻繁にあちこちに出かけていた人で、そういう点からいって海外貿易に興味を持っていたとしても不思議はありません。とはいえ具体的な証拠はございません。

鎌倉時代に入りますと、宋銭流入のスピードは速くなってきますが、鎌倉幕府自体には積極的に海外貿易をしようとした気配はありません。ただ、鎌倉の由比ヶ浜前面の海に和賀江嶋という石積みの人工の島が造られました。私は清盛の経島と構造的にはおそらく同じようなものだっただろうと考えております。鎌倉には多くの中国製陶磁が入っておりますので、幕府も、民間のレ

ベルなら、貿易を促進させることに関心はあったのではないかと思っております。

3人の先生方のお話をお聞きしまして、私のような文献に乏しく推測だらけの論ではない、いずれも具体的な裏付けがある話ですから大変羨ましく思いました。

では考古学の面では、神戸ではどうなのかということですが、残念ながら清盛時代の発掘はほとんどおこなわれておりません。福原にあった清盛邸の近辺は普通の民家ばかりで、大きなビルが建っていませんので、これから掘れば必ずいろいろ出てくるであろうと思います。「ここ掘れワンワン」の気持ちなのですが、残念ながら神戸市には、まだまだその気配はありません。ただ、清盛の別荘推定地から東100メートルほどのところですが、国道428号線（有馬街道）の拡幅によって発掘された祇園遺跡があります。そこに園池遺構が出てきたのですが、そこは福原遷都のときに清盛の別荘に安徳天皇が入ったので、清盛は自邸を明け渡し、近所のこの園池をともなう邸宅に移った、そういう場所ではないかと考えています。

そこからは、中国の吉州窯で焼かれた玳玻天目小碗が出てきました。べっ甲によく似た色合いの、まだら模様の天目の碗です。これは日本でも数点しか出ていないもので、いままで福原あるいは神戸関係で出たものの中では、一番珍しいものです。そういう例外はありますが、鴻臚館跡などで大量の中国産陶磁器が出ている博多と違い、神戸ではまだまだ発掘はこれからです。いくら清盛が中国貿易に熱心だったと主張しても、物証がないではないかといわれると、今に見てろというしかないのが現状です。

さて、ほかの先生方のお話との関連で申しますと、ベトナムの場合は中国と陸続きです。それに対し日本が直接中国に船を送るということは、この段階では船の性能の面で難しかった。当時、日本で最大の船が長さ20メートル程度、幅2メートル前後でした。太い丸太をくり抜いて船体部を造り、上に構造物を造るという、かなり初歩的な船、これを準構造船といいます。帆は1枚のむしろ帆、その他の推進力は両舷に張り出した座席に座った水夫たちがかけ声とともに櫂を漕ぐ形です。底は丸いですから波切りができない。大海原を航海するには全く能力不足でした。したがって来航した中国のジャンク船の帰り船か、あるいは博多には中国人街がありましたから、そこにいた中国商人が持っていた船で中国へ行くということはありましたが、日本独力で自前の船を仕立てて中国まで行く力はありませんでした。

遣唐使も航海の安全が危惧されて中止になるぐらいですから、海という障壁は極めて大きかったのではないかと思います。網野善彦さんは、日本は海に囲まれていて、それが自由に海外に出ていく便宜になったとおっしゃられましたが、私は日本の船の能力から考えて難しかった、少なくともこの段階ではそうであったと思います。日本が海洋国家だった時期は、前近代には朱印船貿易のときぐらいだったのではないかと思います。

そういう意味では、中国との交流の仕方でいうと、陸続きないしは島づたいに可能な交流と、大海原を越えてゆかねばならない島国とでは、その違いは大変に大きかったであろうと思います。そのことをとくに申し上げておかなければと思います。私のお答えは、だいたいこんなところです。

高久：ありがとうございました。日本は海に囲まれているので、海洋に関して先進的であるとい

うのは間違いだということですね。北部九州と朝鮮半島との間では海を越えた交流が古くからおこなわれていましたが、それにも関わらず船がなかなか発達しないというのは皮肉なところではないかと思います。

実は時間がほとんどございません。討論にはなりませんでしたが、先生方から追加のコメントということで、討論に代えさせていただきます。ご了解いただければ幸いです。

本日は最後のシンポジウムとなりますので、5年間の総括で最後を締めたいと思います。では、まず荒木先生に総括をお願いしたいと思います。

（フロア）荒木：元教員になりますが荒木でございます。私たちのプロジェクトは、この5年間、東ユーラシア地域という大きな地域設定をたて、それ以前の5年間は東アジアという地域設定で、ヒトやモノの「移動」に力点を置いてプロジェクトを推進してきました。そこで一貫して求めてきたのは、日本史・アジア史の文献史学や考古学の最新の成果の把握であり、問題の所在の確認でした。

このプロジェクトの前身は、井真成墓誌に関わる総合研究にあり、これによって国際シンポジウムの組織化の経験をつむことができました。その成果は、専修大学・西北大学共同プロジェクト編『遣唐使の見た中国と日本』（朝日選書、2005年）の刊行に結実化させることができました。

その後、本学所蔵のベルンシュタイン文庫のフランス革命関係史資料の重要性を国際的に周知させる意味を込めて、2003年から5年間かけて実施したプロジェクト（「文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター整備事業」として採択される）は、フランス革命の世界史的意義をハイチ・インド・中国・日本などにおいても確認したプロジェクトでした。

本プロジェクトと直接つながるものが、2007年度から2011年度にかけて実施してきた文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「古代東アジア世界史と留学生」でありました。

2014年度からは、文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に申請しておりました研究プロジェクト「古代東ユーラシア世界の人流と倭国・日本」が採択され、新たに「古代東ユーラシア研究センター」を設置し、2018年度をもって終了となります。

こうした経緯をもつ私たちのすすめてきた研究プロジェクトは、当初から、研究者だけでなく一般の方を対象とした＜研究成果の地域還元＞型の公開講座を組み込み、他方で、学界への問題提起を含むシンポジウムにも取り組んできました。そして、それらは、必ず、『年報』に反映させ、大学・研究機関などに配布し、成果の普及に努めてきました。

今日もたくさんの方々が来て下さっているわけですが、当初から新聞やその他を通じてこういうものがあるということを聞いて会場に多くの方が来てくださいました。最初の頃は一般向けという狙いはあったものの、そうした趣旨を事前に説明し、報告をお願いしておりませんでしたので、報告の中には非常に難しいと感じたものもあったのではないかと思います。それでも、フランス革命を5年間やり、その後、日本とアジアを中心にしたところを10年やっていく中で、公開講座・シンポジウムの1つ1つの報告はなかなか難しかったかもしれませんが、それでも通い続けていただく中で研究の先端にふれ、随分と新しい世界を学ばれたことと思います。

こうした熱心な一般の方々が、参加して下さったからこそこういうプロジェクトが続いてきたのではないかと思います。そして、こういったプロジェクトを10年間やってきたことに、私たちも誇りにしてよいのではないかと思います。

これまでの10年間の取り組みの成果や課題の子細をお話しする場ではありませんので省きますが、最終的にまとめる文章には、我々はもう少し自信を持って10年間の成果を語るべきでしょう。勿論、より大切なのは、そこから得たものをさらにこれからどう継承していくかという点ではありますが……。

最後に、10年間にわたって公開講座・シンポジウムに参加して下さっていた皆様方に改めて、感謝を申し上げます。また、この10年間に実に多くの本学以外の先生方のご尽力をいただきました。人文科学の軽視が広がり、人文・社会科学の研究者自身も自信の喪失から目先の興味に目が行きがちです。こうした状況では、共同研究がなかなか難しくなってきています。多くの研究者と、もう少し広い視野と現代的な関心を持って共同研究もやりましょうということを訴えることのできる研究組織・プロジェクトが、これからも生まれて欲しいと思います。専修大学に期待するところ大です。以上です。

高久：ありがとうございました。残された課題はとても大きいと感じました。

もうお一方、長い間この研究を支えていただきました鈴木靖民先生から総括をいただきたいと思います。

（フロア）鈴木：鈴木靖民です。荒木さんのお話を久しぶりにうかがいましたが、私も感じていたことを話してしまわれました。私なりの立場、観点で振り返ってみます。

最初の5年間は「東アジア世界史研究センター」を立ち上げて活動されたのは、文部科学省の私立学校に対する助成による研究支援事業でした。私がこの共同研究に関わったきっかけは、2004年、中国の西北大学で井真成の墓誌が見つけられ、遣唐使など対外関係を研究してきた私と、西のほうでは東野治之さんが、マスコミを通して墓誌の一部を知らされ、密かに研究に着手したことにあります。一番肝心の情報は西北大学と交流していた専修大学がずっと把握しておられました。中心におられた矢野建一先生も他人に言えずに苦しかったのではないでしょうか。

そうした関わりで、公表されると専修大学が朝日新聞とともに井真成墓誌をめぐるシンポジウムを開き、それを基礎にして東アジア世界史の研究プロジェクトを、遣唐使や留学生の実態解明ということから始められました。留学生から広げられて東アジア各地の「人流」という、多様な人の交流あるいは移動という問題を取り上げて、中国、韓国などからも研究者を招いてシンポジウムを開かれ、随分成果を上げられたと思います。その後しばらくブランクがあったのですが、2014年からは「古代東ユーラシア研究センター」と名称を変え、範囲も東アジアから東ユーラシアに広げて、「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」ということで5年間、先のプロジェクトと合わせて10年間、主としてシンポジウムの形式で、また若手の実地調査なども含めて、いろいろな分野で国際的、学際的な内容でもって成果を上げてこられました。

私の記憶では人流でも、特に渡来人を複数回問題にしておられると思います。どちらかという

と方位でいえば東西の交流だったと思います。日本列島の中もそうですし、シルクロードなどの中央アジアの人の交流もありました。中国と朝鮮半島の間の交流もありました。中国では渡来人かと帰化人とはいわず、移住民と称しました。それから、中心と周縁について、今回もそうした性格の報告がありましたが、そういう事実の議論がおこなわれました。そして、今日の報告は、方位でいうと南と北の交流だったと思います。時代も新津さんのご報告の1、2世紀ごろから始まって、髙橋さんの12世紀ぐらいまで、時間軸が大変長く、また、空間も広いものであったと、大雑把にまとめられるかと考えます。私は最初の講演は聞くことができなかったのですが、境界史や地域史という括り、または概念の設定をなさっておられました。これは中国での言い方だと辺疆史だと思います。

しかし、中国の辺疆史は民族認同などといって民族問題から見ますが、今日の先生方のお話をうかがいますと、地域史を超えるような議論になったと思います。私は境界史、地域史を周縁史とも呼んでいますが、つまり主に古代に限ったプロジェクトだけれども、時代を広げても応用がきく、汎用性がある歴史の重要な問題の一環を、この5年間進めてこられたということを今日も実感しました。

一方で、地域や国家を越える、国境をまたぐ歴史像の追求をずっと5年間続けてこられたともいえる気がします。こうした交流や移動をコンセプトにして研究してこられましたが、多面的な見方をしますと、逆に国境や国家、つまり先ほど蓑島さんが北海道に関して触れておられたように、国家を含めた公権力は何かということを自ずから問題として浮かび上がらせたことにもなると思います。そうすると、現代的な課題も絡んできて、ご存じの日本やヨーロッパやアメリカも含めた移民や難民という現代的な問題と古代とを、直接結びつけることの当否は別として、頭の中では背景として持つことが可能なわけです。

北海道については、私も北海道の古代を研究しておりますが、今日もお名前が出た瀬川拓郎さんは以前、北海道、つまりアイヌ民族は国家をつくらなくてもよかったと話しておられました。今日来られている市民の方も、我々、歴史を研究している者も、古代の歴史は政治史や国家史に集約して述べることのほうが多く、あるいは歴史上の人物が出てきたほうがわかりやすいのです。しかし、今日はほとんど歴史上の特定の人物は出てきませんでした。だから、政治史などとは異なる人やモノの交流史の意味といったことも考えさせられます。

もう1つ、自分の研究に引きつけて申しますと、新津さんが注で引いてくださり、私がすでにこのプロジェクトでお話したことで、その後、論文もありますが、私は中心と周縁という2つだけに考えずに、中心と周辺と辺縁の三部構成、または三層構造でもって東ユーラシアの歴史的な構造を考えるという説を唱えております。中心を中央と言い換えてもいいのです。これは、ほぼ中国の史書に拠るという史料のあり方と関係があります。

中国では国家が南北両朝の2つある時もありますが、中国が中心軸となり、それで大きく東ユーラシアを被っています。つまりパミール高原やマラッカ海峡よりも東、場合によってはインド、ペルシャまでも大きく被われ、そこには共通性のある同一のまとまりが認められます。その東ユーラシアの中には、中央アジアやインドや、それに当然東アジアも含まれ、またそれぞれが中心となる小さなまとまりがあります。そして、今日の新津さんや菊池さんが取り上げられた南アジア

や東南アジアの古代にも、それぞれの括りうるまとまりがあります。私の考えは、東ユーラシアという大きな括りというか、大きな傘をイメージしていただけるといいのですが、その傘の中に小さい傘がいくつもあるということです。それは重層しますが、矛盾することなく、併存・共存する、それに流動性があると考えられます。

結局、東ユーラシアや、菊池さんが取り上げられた海域アジアの交易、交流が共通性のある歴史像を結ぶ、復元やイメージさせるということです。その意味は世界と言っていいという考えですが、このプロジェクトの代表である飯尾さんは初めの頃は世界と称することにかなり慎重で、懐疑的でした。それでなぜ代表をやるのかという話もありますが、私がいままで論じた表現をピックアップして言うと、私は共通性や同一性、システムやルール、そして「リズム」とまで書いた記憶がありますが、それらが事実として認められれば政治、経済、社会、思想などにおいて世界としていいのではないかと思っています。そのほうが日本やそれぞれの歴史を説明しやすい、理解しやすい、認識しやすいのではないでしょうか。今回も東ユーラシア世界といわずに、東アジア地域論と呼んでおられますから、世界論はまだまだ決着がつきません。

最後に、今日、今回学んだことは、これまでの私の研究も重ね合わせますが、交流や移動の本質は何かというと、1つは貿易・交易です。その前提に生産、生業がありますが。それを共同研究では文献の歴史学や考古学などで明らかにしてきたのだろうと思います。そこからいろいろなものに広がっていきます。髙橋さんの述べられた『太平御覧』については、最近の研究では、古代から近世、戦国ぐらいまで唐物の嗜好が盛んでしたから、これも唐物とみる人もいたと思います。唐物とは人に見せびらかす、持って自慢するもので、おっしゃるような面はもちろんですが、もっと古い時代でいえば、考古学でよく言う所有者の「威信財」にも通ずる側面もあるのではないでしょうか。

もう1つは何かと言うと、宗教、信仰や思想です。それが交流や移動で各地に広がったり、縮まったりしながらいろいろなものに影響してさらに広げていくと考えます。東アジアの中で、外来の文化や人を受け入れる、しかも選択して受け入れる、そして融合して各地の文化や社会がつくられるのでしょう。人、モノの交流が文化や社会をつくっていくということを見通すことができるのでないか、あるいは地方から、周縁から中央に何かを突きつけて、照射するようなこともあるのでないか。そうしたことが今後の研究者の課題であります。各地の歴史事実の比較、そしてさまざまな総合が必要です。これらが模索すべき方向性なのではないか、追求すべき歴史像ではないかと思います。

市民の方にとって、どういう歴史認識をすればいいかは難しいことですが、決して政治や英雄、偉人の歴史ではない、むしろそういう国家や社会を支える人やモノを、このプロジェクトは研究し、明らかにしてこられたことを理解していただければと思います。

大変大雑把ですが、ともかく、日本の遣唐使から広がって、さらに国を超える東アジア、東ユーラシアへと研究の幅を広げてこられたのは、専修大学の先生方や卒業生、そして実務で支えてこられた現役の若い方々の力があってのことだと思います。そうした皆様に敬意を表しまして、私のまとまりのよくない総括といたします。

高久：どうもありがとうございました。本日は午前中から夕方まで、長時間にわたりご参加いただきまして誠にありがとうございます。このセンターのシンポジウムは、今回が最後ということになります。また、どこかでお目にかかることができますことを期待しております。これまで、長きにわたりまして、いろいろご協力いただきまして、誠にありがとうございました。

今年度の成果につきましては、来年３月に刊行される『年報』第５号に掲載する予定です。『年報』は、専修大学生田校舎で配布をしておりますので、ご活用ください。また、本学ホームページの「リポジトリ」からもダウンロードが可能です。また、専修大学では毎年秋に「歴史を紐とく」などの公開講座を実施しておりますので、そのような機会に入手していただければと思います。

本日は長時間にわたり、ご清聴いただきまして、ありがとうございました。

【了】